

河鍋暁斎 躍動する絵本 めくるめく、お祭り騒ぎ

太田記念美術館 前期 21. 10. 29～11. 23 後期 21. 11. 27～12. 19

前後期で全点展示替え



「河鍋暁斎」(1831～1889)は、幕末から明治にかけて、狩野派でありながら浮世絵も数多く描いた絵師で、近年、特に注目を集めていて全国各地の美術館で様々な展覧会が開催され、画伯特有の「筆画」や「版画」が紹介されている。

画伯は“デラシネ(“deracine”：故郷喪失者)の哀しみを生き抜いた画家とされ、“うまい、そして泣きたるほどおもしろい”と評価されている。

しかしながら、暁斎の絵を一冊の本にまとめて出版した「絵本」というジャンルは、これまでほとんど注目されてなく、本展では人物や動物、妖怪などを躍動感あふれる筆使いで描いた画伯の「絵本」を大量に展示することで、「画鬼」と称された「暁斎」の知られざる真髄に迫るという企画である。展示内容は、『暁斎漫画』『暁斎鈍画』『暁斎酔画』『暁斎百鬼画壇』など、暁斎の絵本の代表作を全頁展示(前期と後期で全頁展示替え)するもので、頁総数は「420頁強」という膨大な量となり、尽きることのない暁斎のパワーとイマジネーションに圧倒される内容の数々である。

暁斎の絵本の魅力は、人物や動物、妖怪たちがまるで踊っているかのように生き生きと描かれていて、絵本サイズA5サイズ(21x4.8cm)以下、中には『ちくさの宝』のような見開きで9.5x13.0cmという極小絵本もあり、ミクロ画面に描写された人物や動物、妖怪たちの躍動感あふれる表現に注目される。



河鍋暁斎 《暁斎百鬼画壇》 前期



河鍋暁斎 《狂斎画譜》 後期